

第4章 学校（園）は家庭・地域社会とどのように連携したらよいか

教育は学校だけが責任を負うものではない。学校と家庭・地域社会が手を携えてそれぞれの教育力を発揮することが必要である。そのためには、まず、学校・家庭・地域社会がそれぞれの責任を果たそうと努力するとともに、学校が子どもの問題を抱え込もうとせずに、家庭や地域社会に積極的に働きかけ、共に解決に当たろうとする姿勢を示すことから始める必要がある。

衝動的・攻撃的な行動や授業妨害・拒否の問題を解決するために、学級の壁を取り払って問題解決に当たった例、家庭や地域社会と連携して子育てを考えようとしている例、関係機関との連携によって保護者の悩みを解決したり子どもの居場所を広げたりしている例も多く見られ、これからの学校教育の在り方を考える手掛かりとなっている。

本章では、既実践されている「学級・学校を開く」「家庭や地域社会と連携する」「関係機関と連携・協力する」事例を紹介し、その意義や配慮点を示す。

1 学級・学校を開く

(1) 校内の連携による学級懇談会によって保護者が心を開いた事例

A男は現在中学校2年生であるが、入学時よりさ細なきっかけで教師や友人に暴言をいったり暴力を振ったりすることがあった。2年生になったある時、保健室でたまたま出会ったB男と口論になった。養護教諭は、A男の興奮を静めながら話を聞いた。A男はB男の非を主張し、同時に毎回のように教師から指導されてきたことに強い不満を訴えた。養護教諭は、教師や友人、親への不満を聞き取ることに努め、そのことを、校長、学級担任及び生活指導主任に報告した。

校長は、翌日の職員朝会でこのことについて報告し、生徒への接し方について生活指導主任から提案させるとともに、養護教諭に保護者との面接を指示した。母親は初めは学校の指導に不満をもらしていたが、粘り強く話をする中で、A男の育て方について自分も悩んできたことを語り、接し方を変えようと考えようになった。

保護者の考え方が少し変化してきた頃、定例の学級懇談会が開かれた。学級担任は、この場を、子どもたちの日頃の行動について語り合う場にしようと考えた。当日、保護者の間から子育てについての心配事が出され、それについて話し合われた。また、下校後の子どもたちの様子については学級の保護者全体で気を付けていくことになった。それにより、A男の保護者も自分一人で悩むことなく、周囲の援助を得ようとするようになった。このような経過を経て、保護者だけでなくA男も、担任や養護教諭を信頼し、友人との関係でキレそうになったことやその時の気持ちなどを語るようになり、暴力を振るうことも少しずつ減ってきた。

ア 校内の連携による学級懇談会等の意義

学級内で子どもの問題行動が発生した場合、学級担任としては何とか自分の力だけで解決しようとする思いが強く働き、結果として問題の拡大を招いてしまうことがある。問題の拡大を未然に防止するためには、当該の子どもの心を傷つけないよう配慮しながらも、学級懇談会等を開催し、保護者の理解と協力を得るよう「学級を開く」姿勢で取り組む必要がある。また、学級懇談会を開催する場合、問題によっては学級担任一人で対応しようとしなくて、事前に校長、教頭に相談する。また、学年主任、生活指導主任、養護教諭などと連携し、必要ならば出席を求めて学校全体として取り組んでいる姿勢を示すことが大切である。

問題行動を起こしている子どもの保護者は、自分の子どもや自分が非難されるのではないかとの思いを抱いていることがある。このような状況で話し合いを行っても保護者が心を開いて話をすることは容易ではない。その意味でも、学級担任とは異なった視点で子どもを見ている養護教諭等も参加し、学校への要望をきちんと聞くとともに、保護者同士が互いに相手を非難し合うのではなく、共通の問題として対応を考えられるようにする配慮を行いながら、話し合いの場を設定することが有効である。

イ 本事例における校内の連携による学級懇談会等の効果

事例では、養護教諭は、生徒と面接するほか、校長の指示によって保護者とも面接を繰り返し、保護者の心を開くための支援を行っている。

養護教諭は、学級担任とは異なり、より客観的な視点で子どもを見ることが出来る立場にある。子どもの心のケアについても、そのような立場を生かして学級担任や校内組織、校長・教頭と連携を図りながら役割を果たすことにより、有効な支援を行うことができる。

また、学校と当該保護者との連携だけでなく、保護者同士の連携が必要な場合には、何でも気軽に話し合える場として、事例にあるように保護者の話し合いの場とする学級懇談会などを開催することにより、心を開き合うことが可能となることがある。

ウ 配慮すること

- (7) 研修会等を実施して、子どもの心を癒すことの重要性を全員で確認し取り組む。
- (イ) 学級担任は、子どもの行動等についての情報を一人で抱え込むのではなく、日常的な情報交換を行うよう努める必要がある。
- (ウ) 学級以外の場における子どもの行動の変化や子どもが表現する小さなサインも見逃さないために、養護教諭、事務主事、主事などからの情報を受け止める校内体制を確立する。そのため、各学年会や生活指導部会、教育相談部会等に必要に応じて養護教諭等が参加し、各学級担任と情報の交換を計画的に行うようにし、校内組織を活用して組織的に対応できるようにしておく。
- (エ) 保護者会や学級懇談会を開催するに当たっては、事前に当該の保護者や運営の中心となる学級PTAの役員とも十分話し合い、当該の子どもや保護者の心情に十分配慮し、人権を尊重する運営が確保できるよう準備しておく。

(2) 授業公開や地域の人の協力によって、子どものよさを発見した事例

C区では家庭や地域の人たちの学校への理解を促進するために、学校公開週間を設けた。保護者のみならず住民、近隣の幼稚園・保育園、小・中学校、高等学校の教職員にも公開し、1週間にわたり始業時から子どもの下校時までの様子を参観してもらうことにした。

D小学校では、地域に住んでいる多くの方が学校を参観に来た。その中の一人が校長室に立ち寄り、「昔からの遊びをよく知っているので何かお役に立てることがあれば」と申し出をして帰った。昔遊びが年間計画にあった5年生が早速、学校裁量の時間にお手玉作りの指導を依頼した。

担任の指導を無視することが多かったE子は、その方に「あなた本当に器用だね。上手だからもう一つ家で作ってごらん」と言われ、材料を別に渡された。次の日、E子が家で作った作品を目にした担任は、「よくできている、すごい」と称賛した。このできごとがあってから、E子と担任の関係は次第に良好になり、授業中の担任の話に耳を傾けるようになった。

ア 授業公開や地域の人の協力の意義

- (7) 日常の教育活動を地域の多くの人に実際に見てもらうことで、学校教育に対する理解を深めてもらうことができる。また、学校にとっては、ふだん気付かないことを、参観者の感想や意見から客観的に把握できる機会とすることができる。
- (イ) 教職員及び子ども、地域に住んでいる人たちが相互に顔見知りとなり、相互の協力関係を緊密にしたり、地域における触れ合いのきっかけとなったりする。
- (ウ) 教職員の力だけでは十分な指導ができにくい学習内容について、地域の人々の協力を得ることによって、子どもの学習意欲を喚起しやすい指導が可能となる。

イ 本事例における授業公開や地域の人の協力の効果

- (7) 保護者や地域の方は、区内のどこの学校（園）も参観できたことで、それぞれの学校・学年・学級などの特色や違いを理解することができた。
また、初めて小・中学校に入学する子どもをもつ保護者にとっては、学校の様子や子どもの様子を自分の目で確かめることができ、安心感をもつことができた。
- (イ) 教師と見方や立場の異なる地域の人たちが、子どものよさを発見し、学校がそれを生かした教育活動を行うことにより、教師と子どもとの信頼関係が深まった。

ウ 配慮すること

- (7) 学校公開週間は学校の実情に応じ、数日間ずつ学期ごとに分散したり、土曜日や日曜日を組み込んだりして、地域の人々が参加しやすい工夫が必要である。
- (イ) 参観者の声を生かすため、アンケート等の工夫をする。できれば、参観者の不安や心配事の相談窓口や学校への提案窓口を置くのもよい。
- (ウ) 「どのような人が学校に入ってくるかわからないので、安全面で心配だ」という声に対しては、PTAの協力を得て、受付を設けるなどの工夫をする。
- (エ) 広報活動は、役所の広報紙や町会等の回覧板を用いて、地域の人に周知する。

2 家庭や地域社会と連携・協力する

(1) 教師が保護者の悩みを受け止め、相談機関と連携した事例

小学校4年生のF男は、授業中大声をあげながら椅子を投げたり、文房具をまき散らしたりすることがある。その時は担任がF男の体を抱くように押さえ、静まるのを待つとともに、他の教員に協力を求め、別室で担任と教頭で話を聞くようにしている。F男は、このようなことを繰り返しており、次第に行動が激しくなっていた。

そこで、担任は保護者に連絡をとり、状況説明をするとともに家庭の協力を要請した。担任は校長、教頭と相談し「学校全体でF男を受け止めていく」と話して保護者が安心できるようにした。併せて教育相談機関で相談を受ける方法もあることを助言した。数日後母親はさっそく近隣の教育相談機関に相談に行ったことを報告してきた。担任は家庭内における母親の苦悩を理解し、今後も協力し合ってF男の問題の解決を図っていくことを約束し合った。その後、担任は保護者と相談機関を訪問し、専門的な立場から助言を得るとともに、結果を校長や同学年の教師に伝えて学校としての対応を協議した。

ア 相談機関と連携する意義

子どもの健やかな成長のために学校（園）と家庭が連携を深めることは重要なことである。特に幼稚園には、地域の子育て支援センターとしての役割が期待されている。しかし、家庭内の問題や子育ての悩みなど担任には相談しにくい内容もある。こうした悩みについては、相談機関等の専門機関と適切に連携が取れるよう、日頃からの関係を築いておくことが大切である。

イ 相談機関と連携する効果

事例では、子どもの保護者に相談機関を紹介するとともに、担任も保護者と一緒に相談機関を訪問して助言を得るなど、学校として組織的に協力し合う取り組みを進めることにより、子どもの指導についての見通しをもつことができるようになった。このように、問題により適切な専門機関を選択することにより、問題解決の糸口を見出すことができる。

ウ 配慮すること

(ア) 学校の中で相談機関の情報を共有する

保護者に相談機関の紹介をするには、相談機関の事業内容、所在地、電話番号等の情報を整理し、誰でもが検索できるようにし、情報の共有を図るようしておく必要がある。

(イ) 相談機関を紹介した後も、担任等が紹介先と連絡を緊密に取り、連携を図る

相談機関などを紹介する際、子どもや保護者が見放されたという感情を抱かないよう、学校も従来どおり指導を続けることを伝える。また、紹介先の相談機関と連絡を緊密に取り、共に解決のための努力を続けることが重要である。

(ウ) 相談機関と連携することにより、子どもの姿を多面的により深く理解することに努める

子どもは学校における集団の中で示す姿と、家庭や相談機関で示す姿とが異なることが多い。このことが、連携を進めるうえで誤解を生む原因となることがある。どちらの姿も子どもの一面と考え、相談機関からの情報も取り入れてより深い子ども理解につなげたい。

(2) 地域に情報を発信し、地域の声を受信して学校改善に生かした事例

G中学校では、家庭や地域における子どもの実態、学校への要望、提案などの情報を得るため、学校便りを活用することにした。

時候のあいさつなどはやめ、学校の実情を知ってもらうために「最近、授業において居眠りや私語を平気とする生徒が多く、時には授業が成り立たないクラスがあります。現在この問題に全教職員で取り組んでいます」というような記事を積極的に取り上げた。

学校便りは、学区の町会・自治会回覧板を通じて全世帯で読んでもらえるようにし、読んだ感想や学校への提案などの情報を得る「学校への手紙」欄を設けた。また匿名でもかまわないことを知らせ、学校の住所、電話番号、ファックス番号を載せた。

最初のうちは「生徒によく分かる授業をやっていないからだ」とか、「授業中、地域でうるつく生徒がいるのを学校は知っているのか」などの苦情や指摘が多かった。教員からは「やめたほうがいいのでは」という声も出た。

しかし、続けていくうちに「あなたたち、この時間は学校じゃないの」と生徒に注意しそのことで学校へ電話をしてくれる地域の人も出てきた。

ア 地域に情報を発信する意義

(ア) 学校が抱える問題や子どもの実態などを積極的に知らせることで、現在の子どもの変化や現状を地域の人に理解してもらうことができる。

(イ) これからは、保護者や地域の人とともに学校をつくりあげていく時代である。したがって、学校から情報を発信するだけでなく、地域からも情報を発信してもらうことで学校運営に生かすことができる。

イ 本事例における地域に情報を発信する効果

(ア) 学校に寄せられるものは、どんなに細かいことでも誠実に応えていくことで、一方的な学校への要望や批判が減り、学校改善に役立つ意見や提案が次第に多くなった。

(イ) 子どもの苦情、担任への苦情などは、「そういう見方をすれば確かにそうである」と納得できるものが増えてくるようになった。また、学校に対する見方が様々にあることを教職員が知り、相手の立場に立って考えたり、対応したりすることができるようになった。

ウ 配慮すること

(ア) 情報化時代のこれからは、受信・発信の両方ができることが望ましい。いろいろな苦情や意見などは、学校に対する発信の一つとしてとらえ、それを知らせてくれる手紙、電話、ファックスなどは、アンテナの一つと考える。

(イ) 学校にとっては、外部に情報を発信することをためらう内容も出てくることもあるが、発信するかどうかについては、保護者や地域の人とともに子どもを育てるという観点から検討し、結論を出す。

(ウ) 地域から寄せられるものには、生徒の名前が出てきたり、保護者、家庭の様子などの個人情報にかかわる場合もあるので、対応には十分留意する。

3 関係機関と連携・協力する

(1) アドバイザリースタッフと連携し、子どもの心に働きかけた事例

小学校5年生のH男は、担任や友人に対し暴言をはいたり、暴れたりすることがしばしばある。このようなことを繰り返すうちに、友人関係がうまくいかなくなり、登校できなくなってしまう。家庭でも保護者に対し暴言をはくことがある。母親は病弱のため、H男が幼少の頃から十分世話をすることができなかったという。

学校ではアドバイザリースタッフの派遣を要請し、H男への対応を考えることにした。スタッフは校長等の話を聞き、次のように助言した。「H男は、保護者との親密な関係が乏しく、人間関係について不安感を強くもっている。そのことで日常的にイライラしているので友人関係の調整もうまくいかない。その寂しさが、暴言等につながっているのではないか。H男が安心して話のできる親密な関係の体験をさせることが必要である。」

学級担任は、スタッフの助言を聞く中で、教師自身がH男とかかわる必要性を感じた。学級の雰囲気づくりとともに、学習意欲を失っている算数のドリルをH男用に作成し、スタッフからも勧めってもらうようにした。また、家庭訪問を繰り返し行い、近くの公園などでじっくりH男の不安などを聴くようにした。2か月ぐらいたつと、H男は、算数のプリントも一人で取り組むようになり、授業にも出てみようかなと話すようになった。

ア アドバイザリースタッフ等の活用の意義

子どもの中には、学校生活や家庭生活の様々な要因から、周囲に対して心を閉ざしてしまう者もいる。このような子どもには、教職員が連携して心を開くための努力をすることは重要なことだが、心理学の専門家等学校外の力も得ることにより、一層の成果が期待できる。

イ 本事例におけるアドバイザリースタッフ活用の効果

本事例では、専門家スタッフが校長等に対して、子どもの問題について、個や集団の心理面からの助言を行い、学級担任の意識を変えることによって、子どもの変容をもたらした。アドバイザリースタッフは、臨床心理学や精神医学の専門家と教育や心理などを専攻する大学生・大学院生からなっており、要請に応じて学校や家庭を訪問し、心を開く援助を行っている。特に学生等スタッフは、継続的にかかわることにより、問題解決への有効な手だての一つとなり得る。

ウ 配慮すること

- (ア) 外部の専門家等に依頼することと学校側が担うべきことを、事前に全教職員で共通理解を図るよう打ち合わせておく。
- (イ) 子どもと個別にかかわることによって、該当する児童・生徒がストレスを感じたり、周囲から特別な見方をされないように配慮する。
- (ウ) 子どもへの理解や指導方法等について、随時関係者で話し合うようにする。
- (エ) 結果や効果を短期間で求めようとしないで、子どもの変容の過程を大事にする。

(2) 校内活動の経験を地域の活動に生かし、社会体験を広げた事例

中学校2年生のI子は、授業中はこれといって目立った存在ではなく、また家に帰ると母親からしばしば「勉強しなさい」と言われ、そのたびにイライラすることが多く、学校へ行くこともおっくうになっていた。担任もI子の暗い表情が気になり、どうしてよさを引き出そうか思案していた。そんな折り、母親から相談を受けた担任は、I子のもち味を考慮し、学級の友達を通して「レクリエーション研究部」への入部を勧めた。

活動の楽しさを肌で感じたI子は、やがて同じ部員と共に、学級活動や学年集会でのレクリエーションの企画・運営を担当し、文化祭やスキー教室のレクリエーションを自分で企画・運営していくようになっていった。

学校内で自信を付けたI子は、レクリエーション部の先生に勧められ、地域のサークルでの小学生の指導や青少年協議会との合同キャンプの企画運営、地域のボランティア活動や保護者との共催による炭焼き活動を行うなど、その取り組みを広げていった。

家でも明るくなったI子と一緒に地域での炭焼き活動に参加した母親は、近所の人に「このごろうちの子、学校が楽しいみたい」「小さい子の面倒をあんなに上手に見るなんて、娘を見直したわ」と話し、また、家庭での会話も子どもの興味に沿った内容が増えてきているという。

保護者や地域の人の間でも、「J中学校の生徒は、活発ですばらしい」といった発言が出るなど、子どもたちを理解し、学校を理解していく保護者や地域の人が増えつつある。

ア 地域の関係団体と連携する意義

子どもたちの揺れ動く心の問題をめぐり、学校、家庭以外にも広く子どもたちの「心の居場所」の創出が求められている。そうした中で、学校が地域の関係団体と連携していくことの意義は、子どもたちが学校で学んだことや自信をつけたことを実践していく場を地域に作り出し、していくことにある。

イ 本事例における地域の関係団体と連携する効果

(ア) この事例では、学校の授業では必ずしも力を出せなかった生徒が、部活動で身に付けた特技を地域の関係団体が実施する取り組みにおいて発揮することで、地域のリーダーとしての自信を持ち、生き生きと成長していく姿が見られる。

(イ) 地域で生き生きと活動する我が子の姿を見た保護者が、子どもに対するそれまでの見方を変えていくきっかけをもつとともに、子どもとの日常会話においても、子どもの興味・関心に沿った話題を増やしていく効果をもたらしている。

ウ 配慮すること

この事例が成功している要因の一つは、子どもたちの校内活動の成果を連携の中核に据えていることである。地域との連携を考える際、概してその視野は学校外の活動や場を探すことに終始しがちである。しかしそれでは、体験をさせていただくといった受動的な姿勢に止まることが多い。学校側として主体的な連携を求め共働関係を築くことが、今後の地域社会や関係機関との連携を進めるうえで特に配慮したい点である。